

【教育ノート】

# インタビュー調査からみた 学生参加型広報活動に対する学生の意識

山村 麻予\*, 木村 貴彦\*\*, 福田 早苗\*\*

Attitudes of students for student-led public relations activities;  
Insights from Interview Study

Asayo Yamamura, Takahiko Kimura and Sanae Fukuda

## I. はじめに

いる。

### 1. 大学生生活における課外活動

大学生の学生生活において、課外活動は、学業と並ぶ重要な要素であるとされている。多くの場合、課外活動とは「単位修得に含まれる科目・実習などの正課教育以外」をさし、大学が用意する教育課程のほか、自主的に学生が取り組む活動のことをさすことが多い。これらは、彼らの人格の形成や成長、多様な経験を通して社会的スキルの向上に寄与するといわれている（たとえば中央教育審議会<sup>1)</sup>参照）。課外活動には、部活動やサークル活動、ボランティア活動、インターンシップなど、様々な種類が存在し、それぞれ異なる意義を持つ。例えば、集団競技を行う部活動ではチームワークやリーダーシップが養われ、文化的な取り組みを行う活動では創造力や表現力が高められる。また、ボランティア活動では、他者への貢献意識が育まれ、将来の職業に向けての意識やモチベーションの向上も見込まれる。実践的な実務経験が得られるインターンシップ等でも、社会貢献の意識向上や実務のイメージの具体化にもつながる。これらの活動を通じて、学生は自己理解を深め、将来のキャリアや人生において必要な力を培うことができる。

また、課外活動は異なるバックグラウンドを持つ人々との交流の場でもあり、より広い視野や多様性の理解を促進すると考えられる。そのため、課外活動は、学生の成長を支える重要な教育的役割を果たして

### 2. 学生参加型広報

大学生の課外活動のひとつに、大学の広報活動への参加がある。学校によって活動はさまざまであるが、学生が主体となる X（旧ツイッター）やインスタグラムをはじめとしたソーシャルネットワークシステム（SNS）運営、オープンキャンパスにおける学生スタッフの参加、学校紹介動画の制作、ブログやウェブサイトの記事執筆、さらには地域イベントでの PR 活動などがある。これらは、「学生参加型広報」とも呼ばれ、大学や学校が行っている広報活動のなかで、学生自身が積極的に関与する活動全般のことをさしている。学生参加型広報は、その定義が多様である大学広報全般で用いられることが多く<sup>2)</sup>、ターゲットに対してポジティブな感情をもたらしたり、認知度を高めたりする一方、参加した学生側にも社会性の向上などの一定の効果があるとされている。

これらの活動は、学校の魅力を学生の視点から発信できるという点において、とくに効果がある<sup>3)</sup>。学生が広報に直接関わることで、情報がより具体的なものとなり、ターゲットである高校生やその親世代、また周辺のステークホルダーに対して親近感を与えることができる。また、学生にとっても、自身の経験や意見が大学広報の活動や使用される資材に反映されることで、自己表現の機会となり、コミュニケーション力や創造性の向上に資すると考えられる。さらに、学生

受付日 2024. 9. 6 / 受理日 2024. 11. 17

\*関西福祉科学大学 健康福祉学部 准教授/\*\*関西福祉科学大学 健康福祉学部 教授

参加型広報は、学校全体のイメージアップにも寄与する。

### 3. KKS (Kenko Kagakuka Supporters) の活動

健康科学科では、2020年度より学科の学生有志の集まりをKKS (Kenko Kagakuka Supportersの頭文字、以下KKSとする)として組織し、いくつかの活動を行っている。活動は主に、春学期中にKKS主体で企画する「学科交流会」、通年実施されるオープンキャンパスの学科コーナーの運営、秋学期にある入学前教育や卒業生を主な対象とした同窓会・養護教諭会の運営補佐、広報用資材の企画・作成、そのほか、年度内に実施される卒業生との交流行事に関するアンケート集計、オープンキャンパスや各種行事で使用する掲示物や配布物作成、学科で作成する機関誌である「健康科学科なう」のカット絵の作成や学科特設サイト<sup>4)</sup>の記事執筆などさまざまである。これは、KKSが「学生が、学科内でやりたいことを実施する(交流会など)」、「得意を伸ばし、苦手を克服するための第一歩の場を提供する」ことを目的として組織されていることとも関連し、様々な活動にチャレンジができるようにしているためである。KKSの募集は年度初めまたは学期初めに行い、WEBアンケートを通じて「自分が取り組みたい内容」を、個々の学生から学科の担当教員が収集する。学科が活動内容を決めて参加募集する場合は、それぞれの希望に応じて、各活動を実施する前に参加者について立候補を募るといった形式で運営している。活動ごとにチームが生まれ、リーダーなどの明確な役割を決めることは少ないが、学年が異なる学生が集まることが多いため、上級生が活動のリーダーを務めることが多い。教員側から、個々の学生のプレゼン能力や創造性などの長所を見込んで活動に参加を依頼することもある。なお、学生企画(学生から持ち込まれる企画)は随時募集しており、また、学生からの求めに応じてKKS学生へ企画参加者募集をかけることもある。

これまで、2021年度の学生交流会を皮切りに、資格取得に関する勉強会やゲーム大会などが学生企画として実施された。一方、学科側からもオープンキャンパスや入学前教育のスタッフ募集や学科WEBサイトの記事執筆者募集などを行い、多様な活動の場を提供している。KKSとしての登録数は2020年度36名

(年度途中より開始)、21年度119名、22年度99名、23年度78名、24年度63名(8月31日時点)が登録している。活動参加者は重複があるものの、23年度はのべ数で128名の活動実績がある。

KKSの活動のうち、活動回数が多いものは、オープンキャンパスや入学前教育、広報資材作成などの学内外への広報活動である。学科の魅力を他者に伝えるということを目的に、ときにはプレゼンテーションをはじめとした発表、ときには掲示物や「ほけんだより」のような制作物、行事参加者との交流など様々な活動を実施してきた。学生が参加しての魅力発信は非常に好評であり、学生参加型広報は本学科でも必要不可欠であるといえる。

このようなKKSとしての活動(以下、KKS活動)が学科学生に浸透して今年で5年目を迎え、学生らの成長を感じることも増えてきた。一方で、課題もいくつか見受けられる。たとえば、学生にとっての活動の意味付けが不明瞭であることや、とくに上級生になると参加する学生に偏りがあることである。KKS活動の継続性や、学生参加型広報へのニーズを鑑みても、参加する学生がもつ認識に寄り添い、活動を促進することは非常に重要である。そこで、KKS活動に参加する学生を対象に、彼らの活動に対する意識を、インタビュー調査を通して明らかにする。具体的には、活動に参加した際の感想や意見、動機などを収集することによって、学生にとっての学びや気づきの有無を確認し、整理を行うこととした。また、KKS活動のなかでも回数の多い、広報に関する活動に絞って調査を行う。KKS活動は先述の通り、学生主体での「やりたいこと」の実施やチャレンジの場の提供を目的としており、学生参加型広報を実施する組織ではないが、学生らの取り組みの姿が結果として学科の魅力発信、ひいては学科広報へと繋がることも鑑みて、今回の調査では学内外への広報につながる活動を対象とした。

## II. 方法

### 1. 調査協力者

令和5年度に実施したKKS活動に参加し、調査協力を承諾した19名の健康科学科在学生(4年生7名、

3年生8名、2年生1名、1年生3名)を対象とした。

## 2. 調査手続き

対象とした学生らのKKSとしての活動後、学内の講義室・実習室または研究室にて、活動の振り返りとして第一著者が半構造化面接を行った。調査協力学生 の状況に合わせ、個人またはグループでの実施とし、7名に対して個人で、12名に対して集団(数回に分けたグループインタビュー)で行った。調査前に、今後の活動に生かすための調査研究であることを説明し、許諾を得てからメモによる記録を開始した。要した時間は一人あたり5分程度であった。調査は令和5年秋学期、各活動の終了後、直後から1週間以内に行った。

## 3. 質問内容

調査は半構造化面接とし、以下の4つの項目についてインタビューを行った。

具体的には、①KKS活動の感想、②活動参加の動機、③学生主体の活動のよいところ・他者に伝えたほうがよいところ、④その他感想・意見である。対象となった学生の時間的余裕などに配慮したため、すべての項目について回答が得られない場合も、分析対象に含めることとした。

## 4. 倫理的配慮

インタビューの開始前、研究目的を説明するとともに、①調査協力者の個人が特定されないようにすること、②調査中断や協力の取り消しが可能であること、③協力に不承諾であっても、成績や評価には一切影響しないことを説明し、承諾を得てから調査を実施した。なお、本研究の実施にあたり、関西福祉科学大学研究倫理審査委員会にて審査をうけ、承認を受けている。

## 5. 分析方法

得られた内容はエクセルデータに文字起こしを行い、内容分析を行った。意味のある区切りを単位とし、KJ法に類似した方法でサブカテゴリーを生成した。さらに、可能な場合はサブカテゴリーを統合して上位カテゴリーを作成した。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. 調査協力者の特性

調査協力者が参加したKKS活動は、「避難所演習でのAED講習」「第1回目入学前教育」「第2回目入学前教育」「学科PR動画作成」の4つであった。これらは、2023年度秋学期に行った学生参加型の広報につながる活動である。入学前教育などは直接的な広報活動ではないが、入学を決意する前段階の合格者を対象にしていることから、今回の調査対象に含むこととした。KKS活動そのものに対する感想や意見については、個人・グループの実施形態や参加活動による大きな差がみられないため、以降の主な分析では区別をしないこととする。活動特有の感想についてはサブカテゴリーとして整理することとした。

### 2. KKS活動に参加した感想

感想として述べられた内容は、4つのカテゴリー、8つのサブカテゴリーに分類された(Table 1)。以降、本論文ではカテゴリーは〈〉で、サブカテゴリーは《》で表す。

まず一つ目のカテゴリーとして〈学び〉がある。これは、活動を通じた《気づき》や、普段の学生生活ではできないといった《経験》、自身の得意・苦手などの《自己理解》、そして同様に活動する先輩や他者を見ることによる《観察学習》が含まれる。KKS活動参加者の多くは、その他多くの人が経験する学内活動や課外活動、アルバイト等とは異なる経験を通し、「ふだんできない経験」(協力者E)や、「いい経験ができた」(協力者F)、新たな学びができたと感じていることがわかる。

つづいて二つ目のカテゴリーとして、〈比較〉がみられた。これは《過去の経験》のみをサブカテゴリーとして持ち、すべてが入学前教育での活動経験者の声である。彼らは自身が経験した入学前教育と比較したり、またコロナ禍の影響でそもそも入学前に集まる機会がなかったことを参照したりして、サポートされる側とサポートする側の両視点からの語りがみられた。

三つ目のカテゴリーは〈今後の提案〉である。これは《入学前教育特有》と《動画作成特有》のものが含まれる。《入学前教育特有》では、「高校生は友達作りに来る」(協力者I)、「もうちょっとグループ(ワー

Table 1 KKS 活動に関する感想

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的内容 (一部抜粋)
学び	気づき (7)	人によって「健康科学科のいいところ」は変わるのかもと思った。(協力者 O) [自分ではなく、参加者が] 初めは緊張していたけど、徐々に緊張がほぐれていくのが分かって、そういう仕掛けが大事だなって。(協力者 M)
	経験 (3)	ふだんできない経験ができた。(協力者 E) あまり人に何かを説明する経験がなかったのでいい経験になった。(協力者 D)
	自己理解 (2)	少人数で丁寧に伝えるほうが自分は向いているかもと思った。(協力者 E) まだ人のつながりができていない中に入るの難しいし、自分の課題かも (協力者 N)
	観察学習 (3)	先輩の動き方も見れた。(協力者 F)
比較	過去の経験 (7)	去年の方が盛り上がった。(協力者 I) 自分が1年の時は3月の[入学前教育の]ときのほうが仲良くなれた (協力者 H)
今後の提案	入学前教育特有 (4)	参加者が少ないので、もうちょっとグループ(ワーク)できたらよかったな。(協力者 H) 高校生は友達作りに来るはず(なので)、もっと楽しめる企画がいいかも。(協力者 J)
	動画作成特有 (6)	あまり考えたことがないので、いいところをまとめていうのは難しい。(協力者 L) ショート動画は自分たちもよく見るので、高校生や大学生にアピールするなら必要な取り組みだと思う。(協力者 M)
その他	感想 (7)	参加してよかったと思える。(協力者 F) 楽しかった。(協力者 M)

※サブカテゴリーの後ろに記したカッコ内の数字は、含まれる発言数を表す

ク)できたらよかった」(協力者 H) など、参加者と支援者の両方の視点からの改善策が挙げられた。《動画作成特有》では、PR 動画作成前に行った、学科の PR ポイント探しに対して「いいところをまとめて言うのは難しい」(協力者 L) が、「一つずつの活動について考える方が良い」(協力者 K) といった具体的な指摘があげられた。これに加え、実際に作成したショート動画について「高校生や大学生にアピールするなら必要な取り組み」(協力者 M) といった振り返りも見られた。

四つ目のカテゴリーは〈その他〉で、上記に含まれない《感想》が分類された。ポジティブな感想が主であり、学生有志の集まりである KKS 活動の参加は好意的に評価されることが明らかとなった。

### 3. KKS 活動への動機づけ

自身が参加した活動を含め、KKS 活動に対する動機づけを尋ねた結果、2つのカテゴリーが抽出された。分析で得られたカテゴリー等を Table 2 に示す。

Table 2 KKS 活動への動機づけ

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的内容 (一部抜粋)
自律的動機づけ	経験 (7)	あまりできない経験ができそうだったから。(協力者 B) 他の人と違う経験をしたい。(協力者 J)
	チャンス (2)	部活動との兼ね合いがあってこれまで参加できなかった。(協力者 F) 今年の夏は実習があるので OC などにも参加できないし (協力者 P)
	人とかかわり (3)	授業では話せない人とも話せる。(協力者 H) いろんな人とかかわりたいから。(協力者 I)
	内発的動機 (2)	新入生の役に立ちたいから。(協力者 R)
	学習の機会 (1)	AED の復習にもなりそうだった。(協力者 B)
外発的動機づけ	外発的 (8)	頼まれたから (協力者 Q) 誘われたから参加してもいいかなと思ったけど、【略】。(自ら立候補しないのは) 誰でもいいならいいかなって。(協力者 S)

※サブカテゴリーの後ろに記したカッコ内の数字は、含まれる発言数を表す

一つ目のカテゴリーは〈自律的動機づけ〉であり、5つのサブカテゴリーから構成される。サブカテゴリー

一のうち、最も多くの人が言及したのは「普段できない経験ができる」といった《経験》についてであっ

た。これと類似したもので、これまで機会がなかったことや今後は実習などで時間がとりづらいことなどに触れる《チャンス》についての回答もみられた。このほか、《人とのかかわり》として、学科教員を含めたいろいろな人とのかかわりについて触れたもの、《内発的動機》として「わちゃわちゃしているのを見るのが好き」「新入生（他者）の役に立ちたい」といった自身の内面の気持ちにふれるものも見られた。特定の活動については「復習になりそう」といった《学習の機会》について述べるものも見られた。

これに対して、二つ目は〈外発的動機づけ〉である。サブカテゴリーも《外発的》で、これは「頼まれたから」（協力者 O）の回答に代表されるように、他者からの働きかけによる参加動機である。調査協力者の一人は「誘われたら参加してもいい」と述べ、自分から立候補しない理由を問うと、「誰でもいいなら（私が積極的に参加しなくても）いいかなって」（協力者 S）と説明した。

これらのカテゴリーを比較したところ、〈自律的動機づけ〉について言及した数が多かった。これは、本学科の学生がもつ、他者との交流を望むといった志向性や、多様な人との連携が求められる養護教諭を目指しているという将来目標が関連しているとも考えられる。一方で、「普段できない経験」をしなければならないといった意識が背景にあるとも考えられる。日常

の大学生活以外の経験をしたほうがよい、経験をしなければならぬといった考えをもつ学生は少なく、KKS 活動が新たなチャレンジへの第一歩を担っている可能性がある。

学生を中心とした活動に対して、積極的に参加しないというよりは、他者からの刺激があれば参加できるといった、取り入れ調整の段階にある学生がいることが示された。これは、外界からの刺激に依存する外発的動機づけのなかで、やや自己決定の程度が高まった状態である<sup>5)</sup>。他からの勧誘や依頼を受け、自分なりに参加する意義をやや見出している段階であり、自発的な参加は難しいが、パフォーマンスの向上を見込むことが可能である。この段階にある学生を巻き込むことが、今後の学生活動に必要であることが示唆された。具体的には、教職員からの参加呼びかけだけでなく、KKS 活動中の学生の姿を動画で見せることで、参加への自己決定を促す取り組みなどの実施が効果的と考えられる。

#### 4. KKS 活動の良いところ

今後の KKS 活動を推進するうえで、学生に何をアピールすればよいかということをも目的とした、よいところを問う質問に対しては、2つのカテゴリーが生成された（Table 3）。

Table 3 KKS 活動の良いところ

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的内容（一部抜粋）
経験による成長	経験 (3)	経験になる（協力者 A）
	ポジティブな変化 (2)	大人と話すのが嫌いだったけど、先生とかで慣れて話せるようになった。（協力者 H） プレゼンすることはあがり症で苦手だったけど、怖くなくなった。（協力者 I）
	責任感 (1)	バイトやボランティアとはまた違う責任感がある。（協力者 C）
出会い	他者とのかかわり (1)	人前で話す機会は授業などもあるが、それ以外の人と接する機会になる。（協力者 C）
	縦のつながり (3)	テストのこととか後輩には教えられる（協力者 H） [先輩とは] OC とかこういう機会のほうが接しやすいかな。（協力者 J）

※サブカテゴリーの後ろに記したカッコ内の数字は、含まれる発話数を表す

第一に〈経験による成長〉である。これは、参加動機でも最多であった「いい経験になる」という《経験》への言及を含む。また、このような経験を経て、苦手だったことができるようになったという《ポジティブな変化》をあげるものも見られた。さらに、日常生活とは異なる《責任感》を感じることもできるとい

う指摘もあった。

第二に、〈出会い〉である。単なるプレゼンスキルの向上であれば授業などでも可能だが、「それ以外の人と接する機会」（協力者 C）でもあるという《他者とのかかわり》、同じ活動に参加した先輩や後輩との《縦のつながり》が KKS 活動参加のメリットである

という学生も多くいた。誰かの役に立てるといった社会的望ましさに触れるよりも、学生自身にとっての利得、とくに自己成長と他者との交流があることが、学生が主体となる活動のカギであることが示された。

ただし、単なる交流の場を作ることだけでは学びや成長につながるわけではない。KKSが主体となって運営した他学年との交流会について触れた協力者Jは、「交流会よりも、オープンキャンパスや、こういう（一つの仕事やサポートを一緒にするような）機会の方が（先輩・後輩と）接しやすい」と述べている。同じく交流会について、最上学年である協力者Hは「（交流会への参加を促されても）面倒は面倒だと思った。明確な役割がないから。」と語り、何らかの役割や指標がある必要を指摘した。オープンキャンパスにスタッフとして参加した学生らは、彼らが与えられた役割は遂行できたと自己評価するが、自分で気が付いて行動できたかという評価は低いということを指摘される<sup>6)</sup>。学生参加型広報ならびに学生活動では、ある程度の自由度を作りつつ、学生の果たすべき役割や行動指標が重要である。また、サポートやファシリテートを行う教職員側の働きかけも重要であり、学生と教職員との相互作用による活動運営が、学生自身が明確に目的をもって活動に関わることに結びつくと考えられる。

## 5. 活動内容と学び・気づきの連関

本調査においては、十分なサンプル数を収集することができなかったことから、統計的処理を行わなかった。個人の語りに注目し、発話した内容間および活動内容と、協力者の学年との連関について検討する。

活動への参加に対する動機が〈自律的動機づけ〉のうち《経験》を求めていたと述べた者は、いずれも学外者との関わりが生じ、相手に何かを教える活動（避難所演習、入学前教育）に参加し、感想での語りでは〈学び〉に関することに触れていることが多い（6名中4名）。普段の授業や生活とは異なる場面での経験や、いままで関わったことのない人との活動に参加すること自体に「（新たな）経験になる」という価値を見出し、そこから個々にとっての学びを得ているところに特徴があるといえる。また、〈自律的動機づけ〉のなかでも《経験》を求めて参加した者は「活動の良いところ」として同じく《経験》を挙げる者がみられ

る一方、《人とかかわり》を求めていたと語った者は、〈出会い〉があることをよいところにあげる等、自らの動機と他者へ勤めるポイントに一貫性を示す回答者が一部にみられた。ただし、「活動の良いところ」については、インタビュー調査を実施した際に十分な時間を取ることができなかった都合上、全員から回答が得られていないため考察には注意が必要である。避難所演習や入学前教育は、いずれも非日常的な対人場面が生じる活動であるが、これを「今までにない経験で、自分の成長につながる」こと、「学外者だけでなく、他学年や教員との繋がりを得る機会である」ことそれぞれに価値を覚える学生が存在しており、それぞれについて理解したうえでの周知や参加促進の取り組みが必要であることが示唆された。

これに対し、〈外発的動機づけ〉による参加者は、「感想」についての言及が少なく（7名中3名が無回答）、「良いところ」についての質問での回答が得られなかった（7名中全員が無回答）。これらの参加者は、入学前教育または動画撮影に参加しており、いずれもグループインタビューで聞き取りを行っているため、他の協力者がいたことが回答を抑制したとも推測できるが、活動前の動機づけの有無による学びの違いとも考えられる。〈外発的動機づけ〉によって参加したもののうち、数名は何らかの《気づき》を得るものの、あらかじめつ動機づけの違いによって学生が言語化できる〈学び〉《気づき》には差が生じる。

語りの内容と学年の連関について整理した表をTable 4として示す。活動の感想を求めた際、何らかの〈学び〉について言及があったものは、参加者のうち3年生ないし4年生であった。本調査の協力者に学年の偏りがあることも含めて考える必要があるが、大学生活の間に生じる発達的変化の現れともとらえることができる。つまり、さまざまな大学内外での経験を重ねる中で、KKS活動のなかに意味を見出し、それが自身の中でどのように意味づけられるかを考える能力の成長である。とくに4年生は「良いところ」について《経験》や《ポジティブな変化》に触れる者がみられ、コロナ禍に影響を受け、下級生の頃の経験不足を補おうとしていることもうかがえた。3年生の中には、そのような4年生の先輩との活動を通して《観察学習》を行うことができたこと「感想」で述べるものも見られ、他学年との活動の意義が表れたといえる。さ

らに、「感想」ではなく「KKSの良いところ」として語られた。  
《縦のつながり》ができることを挙げた2年生もみら

Table 4 語りが見られた協力者の数の学年別整理

問い	カテゴリー	サブカテゴリー	語りのあった人数 (人)			
			1年生 (n=3)	2年生 (n=1)	3年生 (n=8)	4年生 (n=7)
感想	学び	気づき	0	0	4	1
		経験	0	0	1	2
		自己理解	0	0	1	1
		観察学習	0	0	2	1
	比較	過去の経験	0	1	0	2
	今後の提案	入学前教育特有 動画作成特有		1	1 3	2
	その他	感想	0	0	4	2
動機づけ	自律的動機づけ	経験	0	1	2	3
		チャンス	0	0	2	0
		人とのかかわり	0	0	0	2
		内発的動機	1	0	0	1
		学習の機会	0	0	0	1
	外発的動機づけ	外発的	2	0	5	0
	よいところ	経験による成長	経験	0	0	0
ポジティブな変化			0	0	0	2
責任感			0	0	0	1
出会い		他者とのかかわり	0	0	0	1
		縦のつながり	0	1	0	1

※活動特有のサブカテゴリーの斜線は活動した学生に該当学年がないことを表す

#### IV. 総合考察

本調査の目的は、学生参加型広報活動に参加した学生がもつ意識を明らかにすることであった。インタビュー調査の結果、おもに2点のことが明らかになった。第一に、KKS活動に参加した学生らはそれぞれに学びや気づきを得て、活動参加自体をポジティブに評価していることであった。第二に、活動参加の動機づけが自律的か外発的かによって得られる学びが異なることであった。

学生参加型広報の効果は、広報の対象となる人にとって親しみやすいことや、学生同士や学生と教職員のコミュニケーションが深まることなど、これまでも指摘されている<sup>3)</sup>。これに加え、本調査において、普段の学生生活とは異なる経験を経て、学生側の気づきが促進されることや、自己理解が進んだり、観察学習の効果がみられたりすることが明らかになった。今後の活動についての前向きな提案が自発的に行われることもあり、結果として「参加してよかった」「楽しかっ

た」といったポジティブな経験として位置づけられていることが明らかになった。大学で実施する活動に参加する学生への効果として体験を通して得る気づきが教育的効果を発揮していることが指摘されており<sup>7)</sup>、継続的に学生が参加できる活動を提供することは必要であると考えられる。

一方、学生が参加する際の動機づけに着目すると、その気づきや学びは異なるものがあることも示唆された。参加した活動内容も異なることも踏まえ、慎重な考察が必要ではあるが、自律的動機づけによって活動に臨んだ場合は、より活動をポジティブに価値づける傾向にあることが示された。鹿毛(2012)<sup>8)</sup>は、自律性や自己目的性を有する内発的動機づけは、質の高いパフォーマンスを生み出し、当事者やその周囲にポジティブな影響を生み出すことを指摘している。このことから、自律的に、「やらされているのではなく、自ら進んで取り組む」といった態度を示す学生は、その活動をした場でのパフォーマンスも高く、結果としてよい学びや気づき、感想を得ていると考えられる。

ただし、「頼まれたから参加した」というような外発的動機づけが一概に悪いわけではない。動機づけは、活動の中で変化する<sup>8)</sup>ことから、今回の調査協力者の中にも、頼まれて参加した場で、自身の課題に気付いた者や、集団内でのアイズプレイクの重要性に気付いた者など、学びを得るものも一定数存在した。学生参加型の活動において、自主的な参加であることが望ましいことは当然であるが、他者からの勧めで参加した学生に、何等かの役割を振ったり、自己決定の機会を与えたりすることで自律性を高め<sup>9)</sup>、有意義なパフォーマンスにつなげることが可能であるとも考えられる。

本調査の限界として3点を挙げる。まず、インタビュー調査の対象者の少なさである。一部の学生にのみしか聞き取りを行うことができなかったことから、詳細な分析を行うことが難しかった。これまでに KKS 活動に参加した学生は多数おり、それぞれに振り返りを行うことによって、学生の意識がより明確に検討でき、さらに学生自身による活動の意味付けも可能になると考えられる。次に、多様な活動の一部にのみ焦点をあてた調査となったことである。KKS 活動自体は、学生参加型広報に限らず多岐にわたる。卒業後の進路として養護教諭を希望する学生が多い健康科学科において、将来の保健室運営にむけての繋がりが明確にイメージできる掲示物づくりや、学生発信の企画運営などへの意識を調べることも必要であろう。そして、学生自身の語りのみを調査対象とした点も課題である。語りによる自己評価に加えて、本学で実施している社会人基礎力を評価する PROG テストの結果をあわせて分析することによって、授業以外の活動が学生の社会的スキルの成長に及ぼす影響を検討できると考えられる。また、経験を経た学生の変化を間近に見ている AA をはじめとした学科教員らからみた他者評価を加えることで、学生参加型広報や学生主体の活動による教育的効果を具体化できるだろう。

### 謝辞

本研究は、関西福祉科学大学令和5年度・令和6年度共同研究「学生参加型活動及び卒業生を通じた学科ブランド力及び発信力向上効果検証研究」を用いて実施しました。インタビュー調査に協力してくださった学生、KKS 活動にご協力ご尽力いただいている皆様に感謝申し上げます。

### 【引用文献】

- 1) 中央教育審議会 (2012). 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申), [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm) (最終閲覧日: 2024年9月4日)
- 2) 福田早苗・山村麻予・木村貴彦 (2023). 我が国の私立大学広報に関する学生募集の観点からみた文献的検討, 総合福祉科学研究, 15, 1-8.
- 3) 室加千佳・寺田康祐・渥美翔司・吉田新・藤本栄子 (2024). 聖隷クリストファー大学看護学部における学生参画型オープンキャンパスの意義と今後の展望, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 32, 61-72.
- 4) 健康科学科公式サイト「学生による学科の学び紹介」<https://kenkou-kagaku.net/category/%e5%ad%a6%e7%94%9f%e3%81%ab%e3%82%88%e3%82%8b%e5%ad%a6%e7%a7%91%e3%81%ae%e5%ad%a6%e3%81%b3%e7%b4%b9%e4%bb%8b/> (最終閲覧日: 2024年9月4日)
- 5) 岡田涼 (2010). 自己決定理論における動機づけ概念間の関連性—メタ分析による相関係数の統合, パーソナリティ研究, 18, 152-160.
- 6) 小田寛人・影山千恵美 (2015). オープンキャンパスにおける学生広報スタッフのあり方と今後の展望, 常葉大学短期大学部紀要, 46, 53-67.
- 7) 長谷川真美・佐藤光栄・柿沼直美・泉明美・平塚久美子・野村政子・永井健太・大澤久美枝・中島富志子・今川詢子 (2016). 看護大学で行う認知症カフェの成果と課題—学生参加と大学の社会貢献の視点から—, 東都医療大学紀要, 6, 49-56.
- 8) 鹿毛雅治 (2012). 好きこそもの上手なれ: 内発的動機づけ, 鹿毛雅治 (編) モティベーションを学び12の理論, 19-44, 金剛出版
- 9) 西村多久磨・河村茂雄・櫻井茂男 (2011). 「自律的な学習動機づけとメタ認知的方略が学業成績を予測するプロセス—内発的な学習動機づけは学業成績を予測することができるのか?—」, 教育心理学研究, 59, 77-87.